

日付:2016年5月8日／聖書:ヨハネの黙示録18:1～8

説教:「天の声を聞く」

「パクス・ロマーナ」という言葉がある。それは、ローマの平和、ローマの力による平和ということだが、その平和は、圧倒的な武力による制圧で奴隷による労働、安価な賃金による差別化された貧困層による労働において、また搾取と多額の税金、信教の不自由を強いる状況において、思想・報道の規制において国が成り立ち、統制されていく……。その「パクス・ロマーナ」が真実の平和かどうか見抜いているのかと、今朝の箇所は問うている。今の時代はどうかとも……。

昨年は「戦後70年」という言葉がよく使われた。しかし、そう単純に「戦後」という言葉を私たちは使っていないのだろうか？ 目取真俊著『沖縄「戦後」ゼロ年』がある。この本は10年前に書かれたもので、2005年の「戦後60年」の時に一つの問題提議をしている。日本が「戦後60年(70年)」という表現をする時に果たして、近隣諸国アジアにおいてその言葉が通用するのか。当然、アジアにおいては、第二次世界大戦以降も戦争があった。「朝鮮戦争」「ベトナム戦争」「中国とベトナム」「ベトナムとカンボジア」、中国と台湾との軍事的緊張関係……。日本の高度経済成長は、このようなアジアの戦争と同時に右肩上がり成長し、豊かな生活が出来るようになった。そのアジア諸国の状況を見る時に日本は「戦後60年・70年」と表現していいのか？……沖縄にある米軍基地からは、これまでに多くの爆撃機B52などが飛び立ち、朝鮮やベトナム、イラク、アフガニスタンなどにおいて爆撃を加えてきた。ベトナム戦争時代に、沖縄の平和団体が沢山の葉を持ってベトナムへ入り葉を届けるということがあった。当然感謝されたが、同時に「何故、沖縄の人たちは沖縄から飛び立つB52を止めてくれないのですか」と問われた。沖縄はベトナムから「悪魔の島」と呼ばれている。沖縄が加害者と気づかされた出来事である。日本はその事実を知っている。戦争に加担している事実はぬぐえない。日本は「戦後」という言葉を軽々しく使うことは出来ないはずだ。

今朝の黙示録は「パクス・ロマーナ」の時代、ローマの平和の時代において、真の平和とは何か問われている。富みや力に仕える生き方は、苦しみ、悲しむ人々を生み出すことになる。そのことに向き合い、気づき、神に立ち返りなさい、そして「天の声を聞く」者となれ、と……聖書は語る。(神谷)